

日本字としての漢字と文字コード問題

桂——ICCの「バベルの図書館」という展覧会で漢字についてとりあげていることもあり、今日は鈴木先生に漢字と日本語というテーマでいろいろとお話を伺いたいと思います。僕自身は、これまで、図書館やコンピュータといった面から漢字や日本語について考えてきました。そこで、話の発端として、漢字データの交換といった情報処理技術の側面から漢字を考えてみたいのですが……。

鈴木——データの交換とはどういうことですか？

桂——簡単に言えば、コンピュータで漢字を表現する際に、これぐらいのデータ規模で表現しましょうという人と、もっと大きなデータ規模で表現したい人との利害を調整するということですね。データの交換という技術的な局面では、どちらかのサイズに合わせる必要があるのですが、いささか政治的な話になってくるわけです。

鈴木——どちらかが譲るということですね。

桂——そうです。これは国際標準の話にもなっています。例えば、アメリカの東海岸には、アジアに関するかなり大きな図書館がありますが、そういう所では当然文献を集めていますから目録を作成しま

す。すると、海外の図書館、例えば日本の国会図書館などと、データを交換したいということになるわけです。そのときデータの表現の枠組みがちがうとデータ交換や共有に支障があるわけです。これは一般に文字コード問題と言われていますが、僕はずっと、この問題は學術機関同士が話し合えばよいと考えていました。しかし現在ご存知の通り、マイクロソフトをはじめとするコンピュータ業界の発言力が大変大きくなって、彼らが業界の標準を作ろうとしている。それが「ユニコード」という業界標準の枠組みです。でも、彼らの立場からすれば、漢数字の「一」も、音引きの棒(一)も、唯物論的には同じ文字とみなしてしまうわけです。もちろん、乱暴といえば乱暴なわけですが、情報処理技術の世界的な普及とそれに伴う合理的な処理の枠組みを確立するといったエンジニアリングの立場からすれば、むしろ自然の流れと言えます。さらには、すべてのテキストを収録し、提供したり交換したりすることのできる電子図書館にリアリティが出てきたことも、文字コードというテーマが議論の俎上に上がってきた背景なのだと思います。

そのコマースリズムの流れを契機として漢字に

漢字という文化装置

Kanji as Cultural Mechanism

特集 | 漢字WAR



Feature:
KANJI War



鈴木孝夫 + 桂英史

SUZUKI Takao and KATSURA Eishu



について議論することは、ある意味で非常にいいチャンスだと僕は思っていました。

ところが、去年、日本文藝家協会で、江藤淳氏が中心となって、文字コード問題をテーマとした「漢字を救え！ 文字コード問題を考えるシンポジウム」が開かれました。そのとき出てきたのは、漢字を用いざるをえない職業作家の表現が電子化され、インターネットや電子図書館などを通じて提供されたり交換されたりする近未来の事態に、言ってみれば職業作家として明確な立場を表明しておこうということですね。その立場の表明は別にいいのですが、文藝家協会の若い作家たちの発言内容を見ると、いきなり「日本語を守れ」的なメッセージになっているんです。漢字データをどのように交換すればよいかといった議論ではなく、むしろ日本語を守れという日本文化を絶対化するキャンペーンになってしまいました。

鈴木——日本語はいま、英語という大きな波に翻弄されているわけですね。

桂——要するにコンピュータは、アルファベット26文字を処理するために作られたようなものだという議論です。これは確かにその通りなのですが、いまこれだけコンピュータが普及した時代に、彼らが何に危機感をもっているかという、自分たちの表現力が技術的なもので狭められてしまうのは我慢がならないということです。

鈴木——狭められるというのは具体的にはどういうことですか？

桂——例えば小説家が原稿を手で書く場合、JIS規格やユニコードにはない漢字を使うかもしれないわけです。よく持ち出される例が森鷗外の「鷗」や内田百閒の「閒」などです。コンピュータで漢字の使用範囲を決められるということはその表現力が狭められることにつながるという危機感です。しかし、そこから急に日本語の表現力といったテーマに議論が集中するのはいささか飛躍なのではないかと僕は思うのです。つまり日本語全体がもっている表象性と漢字がもつ表象性は、関係はしますが、それを分けて議論する必要があると思うのです。日本語で芸術表現をしている人が、漢字の話に問題を限定してしまうのは、少し貧しさを感じます。

鈴木——世界中には、ローマ字とは違う文字体系がいろいろありますね。漢字、キリル文字、アラビア文字、アルメニア文字、ヘブライ文字、そしてギリシア文字など。キリル文字やアラビア文字は、ローマ字

ではないという点では漢字と同列ですが、文字の性質、つまりローマ字に書き換え可能かどうかという点から見ると、ローマ字化しても本質的に困ることはない。ところが日本語などでは、ローマ字化すると飛んでしまうところが出てくるんです。その違いを、誰かがつかまえて議論しているのだろうか、と私はいつもいぶかしく思っています。

国語学の研究者はそれを知りませんし、言語学者は文字には興味がありません。ご存知でしょうが、言語学者にとって文字は洋服のようなもので、和服を着ても洋服を着ても人は変わりません、と。つまり、言語の実体は服の内側だという近代言語学の考え方が、日本の言語学界を支配しているのです。すると、グラフィーム(言語学用語で「文字素」のこと)は言語そのものではなく、言語にとって外的なものだというわけです。それに対して私は、日本語の場合、ローマ字化すると言語の実体が変わってしまうんだと言ってきました。本当は外的な存在だけでも人間という存在に食い込んでしまう靴のようなものだ、と。起源は外的ですが、漢字を千年以上も使ってきたという現実の歴史を踏まえた日本語は、そうでない文字を採用した場合は全然違う道に入ってしまった。これが迷い道なのかどうかは別として、違う道なのだということを認識させることから始めないといけませんね。

桂——文藝家協会のディスカッションには、漢字仮名混じり文という問題認識を発見できませんでした。僕はそのことが少しショックでもありました。漢字仮名混じり文がもっている不連続性という特徴は重要で、例えば一文の中にもそうした断絶がある。ワープロでローマ字変換しているときにも、身体的な振る舞いとしてもそうした不連続性があるんです。単に単語をスペースで区切るとか、音節がバラバラなものを集めると合成語になるとかいうのとは別の不連続性です。作家も含めて日本語で用いられている漢字は、漢字仮名混じり文を前提とする限り「日本字」だと思うのです。

鈴木——漢字だけを問題にすると、それはもともと中国の言葉だったのだから手を組むかという話にすぐなりますが、私は国語審議会で「関係ありません」とずっと言いつけてきました。もう30年以上前からです(笑)。あの頃毛沢東は、中国で漢字を使うのはやめると言っていました。私は、中国語と漢字の関係と、日本語と漢字の関係とは全然違うと言

et nunciaverunt principi
omnia que facta fuerat
cum senioribus conside
ratiā coriosam dederunt
Dicit quia discipuli eu
tunc. et furati sunt cum
suis. Et si hoc audi
sede: nos suadebim⁹ ei

ローマ字

وم الثالث كان عرس في
بل وكانت ام يسوع ثم
يسوع وتلاميذه للعرس
ثم الخمر جاءت ام يسوع
فولهم شئ الخمر قال لها
اه واش بيني وبينك. وفتبي

アラビア文字

וַיְהִי כִּי הָיָה עֵרֶס בְּבֵית
לְיֵשׁוּעַ וְכָאֵם יֵשׁוּעַ
לֵאמֹר אֵם יֵשׁוּעַ וְתַלְמִידָיו
לְעֵרֶס וְהַיְמִין נֶחֱסַר
וְאֵם יֵשׁוּעַ לֵאמֹר אֵם
יֵשׁוּעַ וְתַלְמִידָיו לְעֵרֶס
וְהַיְמִין נֶחֱסַר וְאֵם יֵשׁוּעַ
לֵאמֹר אֵם יֵשׁוּעַ וְתַלְמִידָיו
לְעֵרֶס וְהַיְמִין נֶחֱסַר

ヘブライ文字

1. Начало Евангелия
Христа, Сын

2. Какъ написан
роковъ: «вотъ, Я
Ангела Моего и
цемъ Твоимъ, кото
готовитъ путь Тво
Тобою».

キリル文字

Ἐπισημασθησὶν ἀρχῆς
ἡς ἀγγελῶν

ἡν ἀγγεῖον ἔργων αὐτῶν
ἡν ἀγγεῖον ἔργων αὐτῶν

アルメニア文字

ἌΡΧΗ τοῦ εὐαγγελίου
καθὼς εἶναι γεγραμ
ἀποστέλλω τὸν ἀγγελ
κατασκευάσει τὴν ὁδὸν
ἐν τῇ ἐρήμῳ, Ἐτοιμάσ
τὰς τρίβους αὐτοῦ.”

“Ἦτο ὁ Ἰωάννης β
πτισμα μετανόιας εἰς

ギリシア文字



若い人が使う「超」という言葉です。あれは形容詞にくっつきますね。「ハイパー」とか「スーパー」という意味で使われていますが……。

鈴木——言語学的に言うと、日本語には接頭辞の役目を果たす要素がほとんどなかった。「真」白いとか「小」気味がいいとかその程度で……。確かに「激」安など新しい用法ですね。

桂——そういう言葉がだんだん増えてくると、いままで名詞同士をくっつけて合成語にしていた言葉、例えば「情報処理」とか「白血病」といった言葉とは、違う抽象度をもつ可能性があるのではないかと、そしてより話し言葉に近いかたちで抽象度が極端に上がることがじゅうぶん考えられるし、それが漢字仮名混じり文という書き言葉にフィードバックされてくる可能性があります。僕はこうした動きが最近目立ってきているのではないかと思います。東大にも「超域文化科学専攻」という大学院の専攻ができてしまったぐらいですから(笑)。

鈴木——それは「～を超えた」という意味で使っているんですか？

桂——「インターディシプリナリー」の訳語なんですけど、これはいままでとは異なる抽象性をもっていますよね。

鈴木——それを素直に考えると、利用できるのにいままで眠っていた能力を活性化し拡張することだから、歓迎すべきことですね。美的・歴史的には、「そんなのはありえない」とか「聞いただけでゾッとする」という反応が保守的な人にはあるかもしれないけれど、理論的に言うと使えるはずのものがいままで空位になっていて、ヨーロッパ語との干渉や接触によって、新しい表現が日本語にもたらされるというのは、一種の創意工夫に基づく発展ですね。

桂——そうだと思います。しかし、「超域」もそうですが、訳語を当てるという意味での翻訳の問題が棚上げになったままなんです。

鈴木——最近翻訳家も知的努力をしないで、英語をそのまま「アメニティ」とかやるけれど、明治期の人たちはそれを一所懸命考えて、語源のギリシア語・ラテン語まで遡ったり、あるいは語意を汲み取ったりしてこなれやすかったです。でもいまの人はあっさり「ターミナル・ケア」などとしてしまう。英語はギリシア語・ラテン語を使って高級な用語をほとんど造語しましたし、明治期の人たちは、当時慣れ親しんでいた漢文の素養に基づいて訳語を作ったんで

すが、そうした素養が薄れてきているいまの人にとっては、漢字を組み合わせて作った言葉に対する違和感が増えてきたんですね。だから明治期の人たちが考えもしなかった拒否感があるのかなと思いますね。

桂——そこで問題になってくるのが、カタカナの表象の力だと思うんです。「コミュニケーション」とか「ターミナル・ケア」と言われたときに、これがまた独特の抽象度をもつんですね。役人たちはカタカナ言葉でいろいろなことを曖昧にしているところがあるわけですが、そうしたものと学術用語がもつ抽象度はちよつと似ているのかな、と思うんですが……。

鈴木——似ているところもありますが、非常に違うとも言えます。漢字を組み合わせた学術用語の場合、例えば「白血病」は「しろいろのやまい」のことだと意味解釈ができるわけですが、「ターミナル・ケア」という場合に、この言葉の全体としての意味がわかって「ターミナル」が何か、「ケア」とは何かがわかって使っている人はほとんどいない。そして意外と「バス・ターミナル」などと同じ要素であることが気づかれません。もう一つ例を挙げると、「足のマニキュア」と言う人がいるでしょう(笑)。欧米人は「マニ=手」だとわかるから、足ならば「ペディキュア」だと対応できますが、日本ではなかなかそうはならないんですね。そうすると、たくさんのカナ書き外来語の一つ一つを、構成要素の意味がわからないために全体を一つのかたまりとして暗記せざるをえないのです。だから、記憶に大変な負担がかかることになります。みんな英語を使っているつもりですが、じつはそれもまた新しい鎖国的な使い方であって、日本語の国際化にすごく余計な重荷を増やしている。ところが当の本人たちは国際化時代だからと、なるべく「英語」を使って漢字語を使わないほうがよいと思っているのでしょう。幸いなことに、いま日本で「白血病」を英語風に「ルキミア」と言うまでにはなっていない。さきほど説明したように、「白血病」というと白血球がおかしいんだろうかといった具合に、素人に対しても何らかの手がかりが残されているんです。ところが英語を使う国では、病院に行っても、無学な人はどこに行ったらいいのかわかりません。小児科は「pediatrics」と書いてあるし、産婦人科は「gynaecology」となっていて、ギリシア語を知っていれば「gynae」は「女」ということがわかりますが、そうでないとわからない。ですから、イギリスな

どでは庶民とインテリとのあいだに歴然とした知的格差がついてしまうのです。いま日本で英語をそのまま丸ごと外来語としてカナ書きで使うことが多くなると、英語に見られる上下の知的差別を無意識のうちに取り入れていることになります。戦後の日本はせっかくな知識の平準化を実現しているのに、「国際化」と称してそうした格差をもち込むことになり、国語をみんなにわかるようにしようという意図とは逆の結果になってしまいます。事物についての固有名が少ないときには個別に覚えたほうが効率がいいのですが、数が増えてくると、要素の組み合わせでやっていかないと記憶の負担が大きくなってしまふ。例えば「冬に咲く桜」という意味の「冬桜」と「夏桜」は、「桜」という語が共通であるため同じ仲間だとわかりますが、カタカナ語の英語を使ってそれぞれ別の単語にしてしまうと、相互のつながりがもはやわからなくなる。つまり、ものの知識が必要になって、言葉の上での関係が切れてしまうんですね。いま増えているカナ書き外来語はそうしたことをやっているわけですよ。

桂——確かにカタカナ語の場合はそうだと思うんですが、翻訳された専門用語で、僕がいつも例に出すのは「写真」なんですよ。

鈴木——ああ、「写真＝真実を写す」ね。

桂——「光の記録」というのが「フォトグラフ」の元の意味ですね。それが書き換えられてしまっている。

鈴木——確かに「写真」の場合はもとの英語の字面、つまり言語要素を直接には反映していません。それは「airplane＝飛行機」の場合も同じです。明治期の翻訳語には二種のタイプがあって、一つは「automobile＝自動車」のように、「auto＝自」「mobile＝動」といった具合に言葉を直接対応させ置き換えるもので、「白血病」などもこのタイプに入ります。もう一つは元の英語の言葉としての意味ではなく、それが表わしているもの、対象の性質や機能を考えてそれを漢字で表現するもので、写真はこのタイプなのです。つまり漢字による外国語の翻訳には直訳型と意識型があると言えます。どちらがプラスかマイナスか、というのは面白い問題ですね。「映画」はまあ「写真」よりはいいかな？ それに「録音」というのも「音を記録する」わけですが、確かに「写真」とは違いますね。

桂——かなりそこはエモーショナルになってしまうかもしれませんが、僕は美術大学で教えているもので

すから、「写真」を使って「メディアの理解」について説くことがあります。大学には写真をやっている学生がたくさんいます。「フォトグラフ」という英語を知らない学生はいないのですが、「光の記録」と説明するとみんな「なるほど」と言って妙に感心してしまいます。その度に自分で説明しておきながら、何とも言えないような違和感を覚えてしまいます。語源を誇らしげに説くことは、ペダンティックすぎていささか僕の趣味に合わないのですが、漢字を用いた造語が写真というメディアがもっている核心を隠してしまうような気がして、違和感を覚えながらも仕方なく説明しています(笑)。「写真」の場合が示すように、メディアの仕組みも含めて、漢字が当てられた造語から類推されうるセマンティクスが誤解をはらんだメッセージとなってしまいがちですが……。

鈴木——私は保守主義者であると同時に革新主義者で、何でも漢字がいいというではありません。例えば「蛋白質」という言葉は「卵白質」に変えたほうがいいと主張しています。なぜなら「蛋」とは卵のことだし、「蛋」は日本語では他に使われることはまずないんですね。要するに、「卵」のように応用が利かない「蛋」のような孤立的な要素は減らしたほうがいい。なるべく少ない数の要素(漢字)の組み合わせで多様なものを表わすべきなのです。「卵白質」と意味内容もわかるけれど、「蛋」では何のことかわからず暗記しなくてはならない。そういう意味では、私は何がなんでも漢字を変えては困るというのではなく、機能的に考えましようと言っているのです。何が効率が高いかを考えるべきです。そしてもし支障があればやめればいい。

ラジオ型言語とテレビ型言語

桂——先生は「日本語はテレビ型の言語である」とご著書の中でおっしゃっています。非常に強い視覚的な表象である漢字の能力は、以前から指摘されてきたのですが、マルチメディアなどと言われる時代にあつて、漢字がもっている視覚的な要素と音声的な要素との関係はあまりちゃんと理解されていないように思います。「テレビ型言語」について、言語の専門家以外にも理解できるように整理していただけますか。

鈴木——日本語は、文字表記という視覚情報を併用しながら伝達を行なっている言葉だということです。この点が音声の区別の上に依っている「ラジオ型の

言語」とは異なっているんですね、日本語がなぜ「テレビ型」にならざるをえないかの原因は、音の種類(音素)が人間の言語のなかでも非常に少ないタイプの言語だということにあります。音素はフランス語36、ドイツ語39、そして英語の45に対して、日本語では23です。これはたくさんの違った単語を組み立てる場合に非常に不利なのです。しかもこの音素を組み合わせたときの自由度が、日本語ではきわめて低い。大ざっぱに言えば、CVつまり一つの子音(Consonant)と一つの母音(Vowel)の組み合わせしか認められないのです。他の言語では、子音と母音がいくつも複雑に重なり合うことができるので、長さの短い使いやすい単語がいくつでもできます。しかし日本語の場合、単語を短くすると、音の種類と組み合わせの自由度がないため、同音語になってしまうのです。

世界の言語で、一つの音のまとまりに80もの意味があるのは日本語だけなんです。例えば文字に関係なく「kou」という音声を出しますね。するとこれには80ぐらいの意味がある。普通の人でも、「甲」「港」「黄」「紅」「口」など、30から40ぐらいの意味を言うことができます。こうしたものすべてが、「kou」という音に託されているので、単独では意味をなさない。それが文字の情報が付加されてくることによって、例えば「黄」といった具合に意味が決定されるのです。しかしこのような同音の多義性は、ヨーロッパ語だと、辞書レヴェルでもおそらくは5つが最高ですね。だから日本にすぐく文盲が少ないのは、文字の知識がないと一般生活ができないからです。ヨーロッパですと、文字はインテリ層のもので、普通の人には話し言葉の世界、ラジオの世界に生きている。一方、日本人はテレビの世界に生きているんです。私はどちらが良いかは論じませんが、どうしても言いたければ、ラジオとテレビでは部品数の桁が二桁は違うんだということです。ヨーロッパの文字は、音に過不足なく情報が入っているのをそっくり文字に写したものです。ところが日本語は、音だけだと情報の一部しか表わせない。そこに出てくる多義性や曖昧性を文字で決定するんです。外国語の学習でも、視覚に頼る癖が小さいときからついている日本の学生は「それはどう書くんですか」と聞きたがる。だから文字抜きで教えるオーラル・メソッドの外国語教授法は、日本人相手だとうまくいかないのです。

桂——アメリカに留学している語学留学生も、ネイ

イヴ・スピーカーの発音する単語が聞き取れないとヒアリングのトレーニング中でも「どんなスペルですか?」って聞きたがるそうだし(笑)。

鈴木——それは文化的な訓練の結果だと思います。別に日本人の本性がそうだというのではなくて、小さい頃からある音を聞くと、それがどういう視覚的表象と結びつくのかを考えることが多いために、英語でも韓国語でもとにかく文字を教えて下さいとなる。ところが、外国人の先生は文字を教えるときに逆に言語の習得が遅くなると言うんですね。こんなわけで、日本語は人類語のマトリクスのなかで特殊な位置にあると言うことができます。良くも悪くもとにかく、この事実を踏まえないといけない。

外国人による日本人のための日本語研究

桂——ここで社会の変容という側面から、日本語や漢字の問題を考えてみたいと思います。日本も高齢化社会が進行して外国人労働力に頼らざるをえなくなるかもしれません。そうなると、必然的にたくさんの外国人が入ってくることになります。産業の空洞化を回避するためには、外国人労働者の流入は避けられない現象です。そのとき日本語が揺らぐ問題が必然的に出てきますね。日本語を使って仕事をし生活を営んでいながら、あまり漢字は知らないといった人々も増えてくるかもしれません。そうなると、これまでのように「正しい日本語」とか「美しい日本語」とは言っていられなくなりますね。

鈴木——その通りです。もし自分の国の言語を純粹に保ちたいければ、外国人に教えたり世界に広めてはいけません。英語がいい例です。シェイクスピアの時代には、世界中に400万人しか英語を話す人がいなかったのに、それが4億人になったときに、当のイギリス人が「これが英語かよ」と思うような言語になってしまった。箱入り娘を外に出せば悪い虫がつくかもしれない。しかしいつまでも家においておけば、歳をとって貰い手がなくなってしまう(笑)。だから国際流通性を獲得するというありがたいうの裏側で、美的には耐えられないものになっても我慢するというのではなくてはならない。日本語も、日本の経済力が高いままでいる限りは広まりつづける。すると日本語は外国人によって刈り込みを受けます。外国人によってどんどん日本語が変質・変容していく可能性は覚悟しておくべきでしょう。

そして日本語研究についても外国人のほうが良い

成果を出すかもしれない。現在ですと、どうせ外国人の日本語研究なんて大学院生程度だとたかをくくっていますが、イギリスを例に取ると、大陸の学者の英語研究のほうが盛んだったので、これではいけないとイギリスの学者が本格的に研究を始めたという歴史がありました。外国人のほうが他者の目で研究できるので、そのほうがいいという利点もあるんですね。だから内からしかできないものはともかく、外からやったほうがいいものは開放すべきです。ところが、日本語は外国人にはわかりっこないという態度は外国人にいらだちを与えるし、だいいちそれは事実でもない。

桂——日本文学研究でいい仕事をしている外国人研究者もたくさんいますよね。

鈴木——たくさんいます。しかし、国文学者や日本の文学者のなかには、そうしたものを評価しない人も多いですね。ドナルド・キーンの本などは、これまで日本人は誰も書いていないのです。でも、ヨーロッパの例を知っていればそんなことには驚かないんです。フランス文学史をイギリス人が素晴らしい本にまとめるし、イギリス文学史もフランスの研究が良い、ということがある。

桂——冒頭に僕が挙げた文字コード問題は、すでに日本語が外国人によって刈り込みを受けつつある現象の一つだと言えるかもしれません。そのことを考慮に入れると、ある意味でいまは漢字あるいは日本語を問い直すいいチャンスなのかもしれません。そもそもコンピュータは、僕たちが使っている言語を文字コードというコード体系で相対化してしまっているわけですから。外国人労働者という生身の人間がやってくる以前に、インターネットをはじめとするコンピュータのネットワークに基づくコミュニケーションのあり方が、日本語を急速に相対化しつつあるとも言えるわけです。その事態の進行は、日本語を科学的に相対化しようとしてきた伝統的な研究者の思惑をも大きく超えつつあるのだと思います。長い目で見れば、コンピュータは、漢字仮名混じり文の研究を外国人にやってもらえるような環境を少しずつ整備しつつあるのかもしれません。もちろん、僕のような言語の門外漢が捨て石にならなければいけない場合もあるわけですが(笑)。

鈴木——私は保守的な老人ですが、でも日本語の美しさを永遠に守るなんてことは考えませんよ。それならば箱に入れておくに限りです。ただしたとえ外的

接触がなくても、世代差というものがあり、文化遺伝においては不完全学習などの理由でズレが生じてくるので、外部から切り離しておいても変わるんです。しかし外の影響にさらされるとあつという間に変わります。変わることを怖がっては駄目なんです。変わらないもの、不変のものなんてこの世にないのですから。

日本語は歴史的に見ればあまり変わらないほうだと思えますね。英語だと古いものは普通の学者にはまったく読めませんから、文化的連続性が感じられません。日本人はたとえ自分で読んだことがなくても記紀や万葉までが自国の文化だという感覚がありますが、イギリス人にとっては14世紀以前は外国です。文明の統合原理がイギリスは4回切れています。紀元前にシーザーによってローマ化された。そしてゲルマンの民族移動で侵入してきた異民族によって、先住ケルト民族は海の向こうに追いやられたか、あるいはウェールズに追いつめられてしまった。次にスカンジナビア経由でゲルマンの第二波にかき回されて、最後にフランスからのノルマン・コンクエストで300年占拠されました。だから英語という言語はいろいろな言語のごったまぜなのです。

桂——くどいようですが、やはり外国人の研究者に漢字仮名混じり文を一度論じて欲しいですね。

鈴木——それは是非やってほしいことですが、先程申し上げたように、グラフィック的なものは言語学の対象ではないという呪縛がまだまだ強いので、実現が難しいでしょうね。アメリカは特にそうです。最も見込みがあるのはフランスです。エジプト学の根がありますから。ドイツやフランスの若い学者でそうしたことに興味がある人と日本の学者が協力していくといいですね。これは余談ですが、フランスで日本語の研究をやった人はみな疎外されて、自殺するかノイローゼになるか若死にするらしいんです。だから本当の日本の良さはフランスでもなかなかわからないようです。フランスはわりと外国に理解があつて、日本を理解する人もいますが、フランス本国で地位を得られないし、本も売れないというので悩ましいです。たいてい不遇ですね。

桂——僕はそういう人たを不遇にしないためのキーワードが、先程先生がおっしゃった「テレビ型言語」と「メディア」だと思えます。

鈴木——そのことを日本人が理解して援助すればいいんです。ところがそれが文化侵略になるのではな

いかと言って、50代を中心とする官僚や教員は、向こうがやってくれるのはいいけれども、こっちがどうぞと言うべきではない、と尻込みしている。しかしお金を出さなければ駄目ですね。日本の本を送るのに国際交流基金を使えばいい。しかもいらないところに送りつけるのではなくて、必要なのに予算がなくて困っているところに送るだけでもすいぶん違うのに駄目なんです。これは日本の官僚に、日本文化は世界に何かを付け加える良いものをたくさんもっているという自己認識が欠けているからなんです。お茶とお花、それにせいぜい歌舞伎と相撲、そして折り紙といったものくらいしか……。

桂——お決まりの逆オリエンタリズム(笑)。

鈴木——つまり彼らの生活の飾りにはなるけれども、根幹を変えることがない。ところが、日本は幕末・明治に根幹から変わりましたね。戦後もアメリカの影響ですっかり変えられた。このように日本は、他の文明

によって根幹が揺さぶられることに慣れていますが、向こうはそれを認めないし許さない。この点を変えていくこと、つまり欧米文化を少しでも日本化する努力がいま最も重要なことだと思います。経済や技術の面では日本が世界に大きな貢献をしたように、文化や言語の面でも同じことが必要なのです。

✻

[1998年10月1日、ICC]

すずき・たかお——言語社会学、慶應義塾大学名誉教授。著書=『ことばと文化』『日本語と外国語』『教養としての言語学』(岩波新書)、『閉ざれた言語・日本語の世界』(新潮選書)、『日本語は国際語になりうるか』(講談社学術文庫)など。

かつら・えいし——情報学、東京造形大学助教授。著書=『インタラクティヴ・マインド』(岩波書店)、『メディア論的思考』(青弓社)など。編著=『20世紀のメディア3——マルチメディアの諸相とメディアポリティクス』(ジャストシステム)。

